

小-34

犬の炎症性疾患における自己抗体の検出

○長尾有紀 玉本隆司 堀 泰智

酪農大伴侶動物医療学

【はじめに】医学領域では、膠原病をはじめとする多くの自己免疫疾患で抗核抗体（ANA）や抗好中球細胞質抗体（ANCA）といった自己抗体が検出されており、病態との関連性が示唆されている。特にANCA関連性血管炎では、ANCA自身が疾患の増悪に関与すると考えられており、病勢の指標として、また治療ターゲットとして注目されている。犬においても多くの免疫介在性炎症性疾患があり、ヒトの疾患との類似性から自己抗体の関与があると推察されるが、その存在についてはほとんど検討されていない。今回我々は、犬の免疫介在性炎症性疾患において、ANCAをはじめとする自己抗体の検出を試みた。

【材料および方法】なんらかの疾患を有し、酪農学園大学動物医療センターを受診した症例60頭より血清を採取し、研究に用いた。症例は炎症性疾患群（多発性関節炎や縫糸関連性肉芽腫など）と対照群（細菌感染症や腫瘍性疾患など）の2群に分け、比較した。健常犬より末梢血を採取し、白血球を分離したのちサイトスピンにてスライドグラスに塗抹し、抗原スライドとした。間接蛍光抗体法を用いて、患者血清中の自己抗体を検出した。

【結果】炎症性疾患群では、多くの症例血清で好中球の核付近に強いシグナルが認められた。一部の症例ではリンパ球や単球にも同様のシグナルが認められた。対照群の中では細菌感染症などの症例で陽性シグナルが認められたが、パターンが異なるように思われた。健常犬や腫瘍性疾患に罹患した犬では、陽性シグナルは認められなかった。

【考察】炎症性疾患群の陽性シグナルはヒトのANCAのパターンに類似しており、ANCAによるものと考えられた。また、一部ではリンパ球や単球にも陽性シグナルが認められたことから、ANAも混在していると考えられる。今回ANCAあるいはANAが炎症を呈している犬において検出されたことより、犬でも自己免疫疾患の発症や増悪に自己抗体が関与している可能性が示唆された。一方で、一部の感染症に罹患した症例でも陽性シグナルが認められたことから、自己抗体は結果に過ぎない可能性もある。しかし、発色パターンが異なることから、全く別のものであるとも考えられる。今後、発色パターンの詳細な検討や、抗原の同定を進めて行く必要がある。免疫介在性炎症性疾患に特異的な自己抗体が同定できれば、新たな診断指標および治療ターゲットになり得ると期待される。